

第13回新潟肺癌研究会総会

日 時 平成元年 6月17日 (土)
午後 2時30分～5時50分
会 場 新潟グランドホテル

一 般 演 題

1) 3 cm以下の肺野孤立性陰影における
thin slice 高分解能 CT の検討

古泉 直也・佐藤 洋子 (新潟県立がんセン
清水 克英・小林 晋一 (ター新潟病院)
新妻 伸二 (放射線科)
横山 晶・木滑 孝一
栗田 雄三 (同 内科)
寺島 雅範 (同 胸部外科)
鈴木 正武・角田 弘 (同 病理)

3 cm 以下の肺野孤立性病変29例に対し thin-slice 高分解能 CT を施行し、その中で腺癌10例と炎症性病変9例について、形、辺縁の性状、spicula, notch, 胸膜嵌入像、気管支透亮像、気管支血管系との関係について検討した。腺癌では、辺縁の性状、spicula, 気管支血管の引き込みなどの特徴が thin-slice 高分解能 CT により明瞭に描出された。今後症例を集積し病理標本との比較を行うことにより、組織型、亜型との関連など更に高い診断能が示されるものと思われる。

2) 肺癌症例における MRI 所見の検討

斎藤 徹・島田 克己 (水原郷病院)
内科

CT, MRI が同時期に施行された肺癌症例12例の MRI 所見を検討した。MRI 装置は 0.5 テスラ超伝導 (横河メディカル RESONA) を使用、SE 法にて T₁, T₂, 及びプロトン密度強調画像を撮像。主病巣は扁平上皮例で T₁, T₂ 強調画像でやや高信号を示す例が多かった。また、腫瘍中心壊死部分は T₂ 強調画像で明瞭な高信号として描出された。末梢2次変化を伴う症例は3例あり、T₂ 強調画像にて高信号を示し腫瘍部分と容易に区別可能であった。リンパ節腫大の描出は気管、血管系との区別が容易であり、冠状断の併用により縦方向の拡がりの把握も可能で CT にまさるものと思われた。左肺動脈浸潤を伴う扁平上皮癌例では MRI にて肺動脈の中断が明瞭に描出された。

MRI 装置はまだ発展途上にあるが、現時点で肺癌症例においてもすでにかかなりの部分で CT 以上の情報を

与えており、今後装置の開発、普及に伴ってますますその有用性が高まるものと思われる。

3) 胸腔内腫瘍診断における胸腔鏡の使用経験

山口 明・斉藤 憲 (国立療養所西新潟
土田 正則 (病院外科))

通常の手術手段で確定診断が得られなかった①悪性胸水の患者、②縦隔腫瘍の患者、並びに、③対側縦隔リンパ節転移を疑われた肺癌患者に胸腔鏡を施行し、それぞれの患者で、腺癌組織や良性貯留液を採取することによって、また、肉眼観察によって、確定診断を得ることができた。胸腔内病変の診断が、X線等による画像検査、気管支鏡、経皮生検等によっても得られない場合があり、胸腔鏡が有用な診断手段となることがある。

胸腔鏡は侵襲的検査ではあるが、約 1cm の皮膚切開で施行でき、縦隔鏡や斜角筋前リンパ節生検と比較すると手術侵襲は少ないので、必要な場合は積極的に施行すべきと考える。

4) 内視鏡的肺門部早期癌の非観血的治療

○木滑 孝一・横山 晶 (県立がんセンター)
栗田 雄三 (新潟病院内科)

内視鏡的肺門部早期癌6例に対し非観血的治療を行った。全例男性で60才から84才、平均71才。BI は 400～1840、発見動機は肺癌検診3例、自覚症3例、X線所見はいずれも無所見であった。内視鏡所見は1例が多発例であったが、表層浸潤が4病変、結節隆起が2病変、表層浸潤+結節浸潤が1病変であった。治療は放射線治療単独が2例、CDDP 50mg+VDS 3mg の BAI に放射線治療を併用したもの2例、NdYAG レーザーに放射線治療を併用したもの2例、NdYAG レーザー単独が1例であった。2年9ヶ月、11ヶ月、11ヶ月、7ヶ月、6ヶ月、2ヶ月現在全例再発の徴候なく生存中である。今後も症例を選んでこれら非観血的治療を積極的に行なう方針である。

5) 放射線治療により完全寛解を得た CEA 高値の肺癌の2例

塚田 博・小田 純一
秋田 眞一・古泉 直也 (新潟大学)
酒井 邦夫 (放射線科)

肺癌・特に組織型として腺癌が他の組織と比較して、CEA 高値の陽性率が高く、その値は治療効果と相関があるとされている。

今回我々は、手術適応外とされた CEA 高値の腺癌

に対して、化学療法に加え、照射療法・計 70Gy を行なうことによって、完全寛解に至った2症例を経験した。

この2症例に共通したこととして、①腺癌である。②縦隔進展を認める。③遠隔転移を認めない。④CEA 高値である。⑤放射線治療が有効とおもわれる。といった5項目があげられた。特に CEA に関しては、2症例において治療前にはそれぞれ、278ng/ml, 3177.2ng/ml と著明高値であったが、照射6カ月後には、ともに、5.1 ng/ml, 5.9ng/ml と正常域に入り、その後も上昇を認めていない。以上のごとく、共通した上記5項目をもった肺癌があるのではないかとおもわれた。

6) 末梢神経障害が先行した肺小細胞癌症例の検討

○宮尾 浩美・水沢 彰郎
佐藤 和弘・野沢 悟
嶋津 芳典・田辺 肇
中島 喜章・永井 明彦 (新潟大学)
来生 哲・荒川 正昭 (第二内科)
斉藤 豊・原山 尋実
湯浅 龍彦・宮武 正 (同神経内科)

最近当科で経験した remote effect によると思われる末梢神経障害が先行した肺小細胞癌3例について報告した。

3症例の組織亜型は、いずれも oat cell type で、Stage はⅢおよびⅣであった。各々先行期間は、11カ月、4カ月、2カ月であった。1例目は感覚性 neuropathy が主であり、2例目は感覚・運動 neuropathy が認められた。3例目は検索不可能だった。また1例目のみ antineuronal antibody は、陽性であった。化学療法施行により、3例とも胸部レ線に改善認められたが、神経症状は不変であった。

本症の早期発見と原疾患に対する早期治療が必要と思われる。

7) 非小細胞肺癌に対する High dose-CDDP 療法の pilot study

○横山 晶・木滑 孝一 (新潟県立がんセン)
栗田 雄三 (ター新潟病院内科)

1989年2月より High-dose CDDP 療法の pilot study を開始したので報告する。High-dose CDDP 療法は、CDDP 80mg/m² (i.v.) を3%食塩水 250ml に溶解し、3時間で day 1, 8 に点滴静注し、VDS は 3mg/m² を day 1, 8 に静注した。以上を1コースとし以後4週毎に繰り返した。また CDDP の血中濃度を測定し、Pharmacokinetics を解析した。登録症例は6例で、全

例が評価可能であり、組織型は肺腺癌2例、肺扁平上皮癌2例、その他2例であった。治療成績は、CDDP 単独投与の2例は NC で、CDDP+VDS の4例はいずれも PR であった。いずれも寛解持続中で、生存中である。副作用は、VDS 併用例で白血球減少が著明であったが、腎毒性は認められなかった。軽度の難聴を2例に認めた。非小細胞癌に対する High-dose CDDP 療法は3%の高張食塩水を併用すること、投与量を day 1, day 8 に分割することで、腎障害を防止でき、その他重篤な副作用も認められず、奏効率は VDS を併用することで、向上することが期待された。

8) 左房合併切除を行った肺癌症例の検討

大和 靖・広野 達彦
小池 輝明・滝沢 恒世
相馬 孝博・吉谷 克雄
中山 健司・土田 正則 (新潟大学)
江口 昭治 (第二外科)

教室で経験した左房合併切除肺癌4例を検討した。全例60才台の男性で、下葉原発の扁平上皮癌であった。術式は肺摘除が3例、胸膜肺全摘除が1例であった。左房合併切除の方法は、鉗子下切除が3例、体外循環下切除が1例であった。体外循環下切除の1例は、欠損部をパッチ補填した。術後 TNM 分類は、T4N0M1 (肝転移) が1例、T4N2M0 が3例であった。根治度は、M1 症例が絶対的非治癒切除であったが、他の3例は相対的治癒切除が得られた。転帰は、3例が術後5カ月以内に死亡したが、1例は3年5カ月の現在、再発なく健在である。以上左房浸潤肺癌に対しても積極的な外科治療を行うことにより、長期生存も期待できるものと思われる。

9) 末梢部発生扁平上皮癌の臨床病理学的検討

渡辺 恒・金井 至
本間 慶一・大西 義久 (新潟大学第二病理)
江村 巖 (新潟大学附属病院)
病理部

〔目的〕：末梢発生肺癌に腺癌が多い事は衆知の事実だが線維化、胸膜陥入を伴う扁平上皮癌も稀でない。今回、末梢発生扁平上皮癌を臨床病理学的に検討したので報告する。

〔対象と方法〕：過去5年間に切除された肺癌症例は279例あり、このうち32例の末梢発生扁平上皮癌を検討した。

〔結果〕：腫瘍分化度では低分化癌の比率が高く、また肉眼的特徴として胸膜陥入は53.1%、空洞形成は50%、線維化は56.3%に認められた。末梢発生腺癌に比して